

Museum News

秋田県立博物館ニュース



ミュージアム・クイズ

上の写真は、当館工芸部門の収蔵資料です。
さて、これはいったい何でしょう？

ヒント：江戸時代の秋田で
見られたものです。

(答えと解説は裏表紙にあります。)



目次

表紙・目次	P.1
企画展・特別展紹介	
（報告）企画展「石斧のある世界」	P.2
（紹介）特別展「徳川将軍家と東北」	P.3
資料紹介	
（民俗部門）「有明行灯」	P.4
（地質部門）「秋田県の活火山」	P.4
学芸ノート	
（地質部門）砂の中から化石を探す	P.5
（考古部門）石斧製作技法の痕跡残置	P.6
（普及・広報班）秋博協活動	P.7
博物館の日常風景	P.8

平成27年4月25日(土)～平成27年6月21日(日)



企画展

石斧のある世界

秋田県東成瀬村の上掬遺跡^{うわはぼ}で日本一大きな縄文時代の大型磨製石斧4点(国重要文化財)が発見されて今年でちょうど半世紀がたちました。この節目の年に、大型磨製石斧の価値をあらためて広く紹介するために本展示を企画しました。また、関連イベントとして「巨大石斧の出土地を訪ねるバスツアー」、「ミニチュア石斧を作ろう」などを開催し、展示とあわせて県内外の来館者の方々から大変好評でした。



▲上掬遺跡出土の大型磨製石斧



▲ミニチュア石斧を作ろう



▲上掬遺跡の発掘体験

▼展示担当職員による展示解説

展示構成

- 第1章 フロンティアたちの石斧
- 第2章 新たな時代を切り開く石斧
- 第3章 石斧をつくる
- 第4章 石斧をつかう
- 第5章 祈りの世界
- 第6章 巨大石斧の世界
- 第7章 消えゆく石斧





《瓔珞》 久能山東照宮博物館蔵

特別展 展示紹介

本展は、代々征夷大將軍をつとめ、江戸時代の政治を主導した徳川將軍家の歴史と、東北との関係性を読み解こうとするものです。

わたしたちのふるさと東北は、東日本大震災によって大きな被害を受けました。戦乱の世から泰平の世を築き、それを守り続けてきた徳川將軍家の歴史を振り返ることは、これからの東北にとって何らかの示唆を得られる機会となり得るでしょう。

展示では、徳川宗家伝来品を中心に、国宝8点、重要文化財11点を含む約200点が出品されます。徳川家康ほか歴代將軍が用いた甲冑・刀劍、天璋院篤姫（13代將軍家定夫人）と和宮（14代將軍家茂夫人）の婚礼道具・銀製品・装束など、江戸時代の最高水準を示す文化財が一堂に会します。当館の開館40周年と徳川家康没後400年という、またとない機会に実現した展示会です。お誘い合わせの上ぜひご観覧ください。

徳川將軍家と 東北 泰平の世の 歴史と名宝

平成25年9月12日(土)
～10月25日(日)



《打掛(白綸子地菊牡丹藤麻葉繫蝶文様)》
伝和宮所用 徳川記念財団蔵
10/14(水)～25(日) 展示

観覧料：一般 … 1,000円(800円) ※()内は20人以上の団体
高校生 …… 500円(400円)
小中学生 …… 300円(240円)

イベントのご案内

- ①歴史学習会「佐竹氏秋田転封は左遷だったか」
 - 10月18日(日) 午後1時30分～午後3時 無料
 - 当館学芸職員 新堀道生
 - 会場 学習室
- ②展示解説
 - 毎週日曜日(10月18日を除く) 午後1時30分～
 - 当展担当者
 - 会場 企画展示室(観覧券が必要です)
- ③ワークショップ
「江戸時代のペーパークラフト「組上絵」をつくろう」
 - 10月17日(土) 午前10時～午後12時 先着10名 無料
 - 小学校3年生以上(小学生以上は保護者同伴)
 - 会場 わくわくたんけん室
- ④「いざ! 記念撮影! ～甲冑を着て武士の装いを体験しよう～」
 - 10月12日(月)、18日(日)、24日(土)、25日(日) 無料
 - 1回目: 午前10時～午前11時 2回目: 午後2時～午後3時
 - 会場 わくわくたんけん室

重文《白檀塗頭形兜》
徳川家康所用 久能山東照宮博物館蔵
10/6(火)～10/25(日) 展示



《東照大権現像》徳川記念財団蔵

民俗部門

有明行灯

座敷行灯の一種で屋内、特に寝室で使われた行灯です。火袋と台箱の二つからなり、通常火袋は台箱の上のせられて周囲を広く照らしますが、就寝時には火袋を台箱に入れます。台箱の側板は三日月形や満月形などに切り抜かれていて、読書や就寝などの用途にあわせて明るさを調節できるようになっています。就寝しても灯りは消さずに常夜灯として用い、夜が明けても空に残っている月、いわゆる「有明の月」が見られるころまで灯りが点いていることから有明行灯と呼ばれました。

台箱の窓からこぼれ出る満月や三日月の灯りが和紙を通して拡散する、趣ある照明器具です。現代のまぶしい照明に慣れた私たちの生活に、もう一度思い出したい柔らかな光ではないでしょうか。

(民俗部門 小野寺 康)



展示紹介

地質部門

大地の記憶 「秋田県の活火山(秋田駒ヶ岳)」

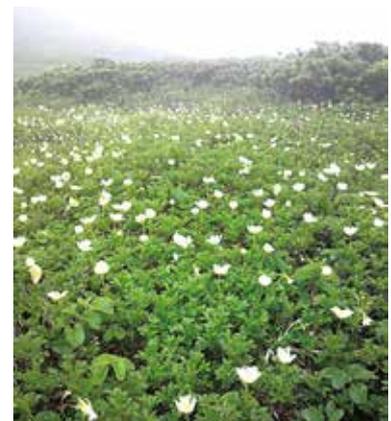
秋田県にはおよそ1万年以内に噴火活動した山～活火山～が6つあります。北から順に十和田・八幡平・秋田焼岳・秋田駒ヶ岳・鳥海山・栗駒山と風光明媚な湖や名峰があげられます。

当館ではこの中で、昭和45年から46年にかけて噴火した秋田駒ヶ岳の噴出物をはじめ写真や動画、そして模型を展示しております。当時噴出した火山弾は、展示コーナー中央でさわることができます。その他溶岩や火山灰、スコリア(黒色軽石)、硫黄鉱山跡から採取した硫黄鉱石はそれにおいを確認できます。ぜひ、五感をはたらかせて展示をお楽しみください。展示をご覧になってからフィールドへ出かけ、感動を味わっていただきたいものです。秋田駒ヶ岳の場合、現在気象庁が出している噴火警戒レベルは5段階のうち一番低い1ですが、お出かけの際には気象庁から出されている最新情報を確認しながら、登山を楽しんでいただきたいと思います。6月下旬には山頂部にあるカルデラ内の通称ムーミン谷では可愛らしい「チングルマ」が咲き誇り、山頂からは日本一深い田沢湖が望めます。いざ、秋田駒!

(地質部門 工藤 伸也)



展示中の硫黄鉱石



ムーミン谷に群生するチングルマ

砂の中から化石を探す ～微小貝化石の整理と保存～

当館の体験型展示室である「わくわくたんけん室」の体験アイテムの一つに「砂の中から化石をさがそう」があります。これは、地層から採取した砂をシャーレに取り、その砂をルーペで見ながら、ピンセットを使って小さな貝化石などを採し出す、というものです。このアイテムは、わくわくたんけん室だけでなく、ジオパーク関連イベントの体験ブースでも子どもたちにたいへん人気です。今回紹介するのは、このアイテムの元になった、研究者の地道な仕事です。

今年になって新たに当館に登録された資料に、「男鹿半島潟西層釜谷地相の貝類化石」146種3,741点があります。これらの化石を採集、分類、同定したのは、当館地質部門に長年勤務し、退職後再び当館で標本整理ボランティアをしてくださっている渡部晟さんです。今回の資料の特徴は、微小貝の化石をたくさん含んでいることです。146種の貝化石のうちのおよそ4分の3は大きさ5ミリにも満たない微小貝です。

- 微小貝の定義ははっきりしていませんが、大人（成貝）になっても大きさが数ミリを超えない貝のことで、その小さいサイズのため、まだまだ研究の余地を残しています。その整理のためには、
- ①地層から貝化石を取り出す（写真1）
 - ②ほぼ同じ種類と考えられるものを選び分ける
 - ③1個1個ルーペや実体顕微鏡で観察しながら、名前（属名や種名）を調べる（写真2）
 - ④整理した標本にラベルを付けて保管する（写真3、4）という作業が必要です。



写真1 地層から分離したさまざまな微小貝化石

今回の貝化石はおよそ十万年前の地層から採集したもので、そのほとんどは現在も生きている種（現生種）だそうです。したがって、名前を調べる（同定する）際には、現生の貝類図鑑や、貝類に関するたくさんの論文を参考にしたということです。ルーペや実体顕微鏡で観察し、貝の外形や特徴的な構造、軟体部の痕跡などをもとに名前を決めるのですが、それでも種名が確定できず、種



写真2 化石を調べる渡部晟さん

名の一段階上の属名までしか決められなかった貝（例：*Epitonium* sp. オオイトカケ属の一種）もたくさんあるそうです。また、保管は普通の標本箱では見失うほどの大きさなので、長さ5cmほどの標本ビンに入れてあります。博物館では、これらの貝化石を受け入れた後、分類番号、受入番号、学名、和名、産地などの情報を記入したラベルを付けて、収蔵庫に保管しています。



写真3 標本ビンに入れ、ラベルを付ける

このように、たくさんの微小貝を含む化石を、まとまった形で整理、保管することは博物館の重要な役割のひとつです。渡部さんのような専門家が、多くの時間や労力をかけてはじめて貴重な資料が収蔵され、後世に引き継がれて行くということを、わくわくたんけん室で体験する子どもたちにも伝えていきたいものです。

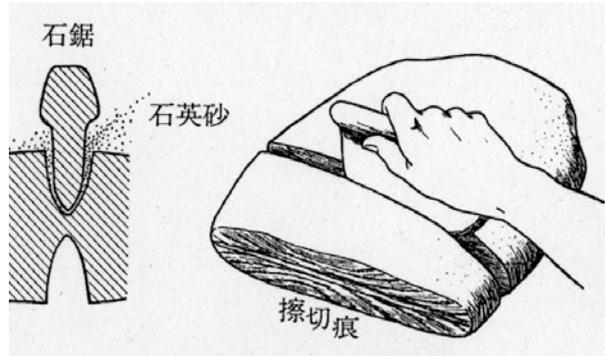
（地質部門 渡部 均）



写真4 木箱などに入れ、収蔵庫へ

石斧製作技法の痕跡残置

磨製石斧には特殊な作り方が存在します。北海道～東北地方の縄文時代早期頃（今から9,000年前）から出現し、前期（今から6,000～5,000年前）に盛行する「**擦切技法**」という技術です。これは板状の原石の表面に石鋸（すりきり）で溝をつけていき、カレーのルーを割るようにパキンッと折って、石斧の素材を得る技法です（下図）。この技法は、とくに緑色凝灰岩*という石材で石斧を作るときに用いられます。



潮見浩 1988 『図解技術の考古学』より

当時、誰でも日常的に擦切技法が使えたというわけではなさそうです。緑色凝灰岩が容易に入手できる地域、たとえば北海道日高山脈周辺や青森県太平洋側に住んでいた縄文人の集落にほぼ限って、擦切技法による磨製石斧製作が頻繁になされる傾向にあることが、遺跡の発掘調査から分かります。そして、それらは製作地を離れて、物々交換品として広く流通したようです。

さて、磨製石斧は最終的に全面が丹念に磨かれて完成するのですが、それでは、どうして磨製石斧が擦切技法で作られたのか否かが分かるのでしょうか。それは、石斧の側面を観察すると、擦切技法で作られた場合、割り取られたときにできる段差（「バリ」）の痕跡（擦切痕）が残っているからです。これは実用品の石斧にも、儀礼用の大型磨製石斧にも見られます（写真）。そこで私は疑問を抱きました。「縄文人ほどの技術があれば、こうしたバリはきれいに取り除けるはずなのに、どうして残っているのだろうか？」

たとえば、北日本でまとまって発見されている緑色凝灰岩製の大型磨製石斧のほとんどには擦切痕が残っています。非常に美しく仕上げられているのにも関わらず、バリの部分が残っているのはあまりにも不自然な感じがします。これらの磨製石斧の共通点を考えると、①産地の限られた緑色凝灰岩、②擦切技法、③特定の場所で製作、④物々交換品として流通する、の諸点が挙げられま

す。

磨製石斧を見ているうちに「もしかしたら、縄文人は敢えて擦切技法の痕跡を残しているのかもしれない」という考えが頭をよぎりました。特定の産地で作られた緑色の美しい磨製石斧は希少価値もあり、物々交換品として重要な位置を占めていたでしょう。しかも、擦切技法という特別な技術で作られたものです。もし、縄文人がモノ作りに投下された技術力にも価値を認める人々だったとすれば、そうした特別な技術の痕跡を敢えて消すようなことはしないのではないのでしょうか。縄文人のモノに対する美意識のなかには製作技術の痕跡もあったのかもしれない。



大型磨製石斧(左)と磨製石斧(右)の擦切痕

もちろん、「いや、そこまできれいに仕上げる必要性を感じていなかっただけだろう」という反対の見方もあるでしょう。しかし、私にはやはり、工芸的水準が極めて高い縄文人が、もう一息で完全に滑らかな石斧が出来るのに、バリを残すという手抜きをしたとはどうしても考えがたい思いがあります。考古学は単に思いつきの想像で終わってしまっては学問として成り立ちません。こうした、意図的な“擦切技法痕跡の残置”の可能性についても、実証的に議論しなければなりません。これは「縄文人の価値観」にも迫る問題であるため、非常に難題です。この問題に挑むには、今後、数多くの磨製石斧の石材、製作技術、擦切技法の痕跡の有無などを調査・分析し、検討するところから着手しなければなりません。こうして、磨製石斧に関する地道で果てしない研究が今、始まりました。（考古部門 吉川 耕太郎）

*ここでいう「緑色凝灰岩」には、岩石学的には異なりますが、緑色岩、緑色・青色片岩等も含まれています。

秋田県博物館等連絡協議会の活動より

秋田県内には、現在、博物館やそれに相当する施設が95館※あります。

そのなかで、48館が「秋田県博物館等連絡協議会」（以下、秋博協）に加盟しています。秋博協は、秋田県内の博物館・美術館・資料館・記念館・その他の類似施設からなり、相互の連絡提携を密にし、活動を点から面へと拡大しながら質量ともに豊かなものにして、博物館等の事業の発展に寄与し、広く県民の要望に答えることを目的として設立されました。

研究においても、展示活動においても、施設単独で行うこともありますが、共同で研究を行ったり、他の施設から資料を借用して展示を行うことで、よりよい内容の展示を行うことができます。その相互協力のための機関としての役割も担っています。

秋博協の活動は、「総会・役員会」・「実務担当者会議」・「秋博協だよりの発行」・「くん蒸サービス」・「ガイドブックの発行」があります。

「総会・役員会」は年に1回開催し、年間の事業計画の決定を行い、総会後には施設見学などを行い、相互の情報交換などを行います。



総会の様子

「実務担当者研修会」は主に外部から専門の講師を招聘し、博物館に関わる様々なことを学び、展示や研究の質的向上を目指す研修会です。

「秋博協だよりの発行」は、年度末に発行している報告紙で、協議会の事業の記録や次年度の予定を掲載しています。

「くん蒸サービス」とは薬剤を使用して、資料の害虫駆除や防カビ・殺菌を行うものです。秋田県立博物館がこのくん蒸を行う際に、加盟館から希望を募り、資料を一緒にくん蒸します。



各館から燻蒸を依頼された資料

また不定期ですが、加盟館の情報を発信する事業も行っています。1990年には「秋田の博物館ガイド」を発行し、2000年には改訂版となる「秋田の博物館－資料館・博物館・美術館－」を発行しました。

その後、冊子媒体のガイドブックのかわりとなるウェブ版の開発をおこない、2012年に「あきた文化的施設案内所」を作成し、インターネット上で加盟館の情報が検索できるようになりました。

掲載情報を加盟各館が更新できるようになったため、展示やイベントの情報をタイムリーに掲載することが可能になりました。県内には個性豊かな博物館施設がたくさんあります。これまで行ったことのない施設にも訪れてみてはいかがでしょうか？
（普及・広報班 鈴木 秀一）



あきた文化的施設案内処

URL : <http://www.akita-museum.com/>

※平成27年度 秋田県の生涯学習・文化財保護
－施策の概要－より

博物館の風景

博物館では調査研究や資料収集、展示、教育普及などさまざまな活動をおこなっています。



自然可変展示「海から来たもの」



歴史可変展示「近世秋田の文化遺産」



新企画
「月替わり考古展示・セッキにドキドキ」



出前授業



専門ボランティア活動



ロビー展での絞り染め実演



「盆踊りと昔語りの夕べ」 in 分館



博物館教室
「アイの葉で染める」

表紙クイズの答え

鍔銭。銅と鉛を主体とした地金で造られており、秋田領内全域で使われていた。刀の鍔の形をしていることから鍔銭と呼ばれるが、片面にある浮き彫りにされた八卦の算木の文様から、八卦銭とも呼ばれる。もう片面には鳥の文様があり、尾の長さから数種類に分類される。